

植田先生にはここ数か月、連続で漢詩(近体詩)の成り立ちの講義をして頂き、今月はいよいよ七言律詩に入りました。ここまで学んで来て、漢詩のルールというのが大体頭に入ったようです。あらかじめ完璧な押韻と平仄のもとに原詩が綴られていることを確認して、あとは詩の世界を、現代中国音でタップリ楽しみました。

今回は杜甫の晩年の作品『登高』、この詩の前半は三峡を下る船旅の場面、後半は重陽の節句に絡めた杜甫の胸の内が描かれています。

杜甫が亡くなる3年前、大暦2年(767年)の重陽の節句に書かれたものらしいです。当時、重陽の節句には、見晴らしの良い高台に上って、酒に菊を浮かべて飲む、という厄払いの風習がありました。病身の杜甫がヨロヨロと高台に上った、までは良かったのですが、人生何度目かの新たな禁酒の誓いのために、これまでこよなく愛してきた酒が飲

めません。老いさらばえて、酒も飲めなくなってしまった、という哀しさが伝わります。

流石超一流の詩人と言われる杜甫の真骨頂は、その哀しさだけでなく、「何度禁酒しても又飲んでしまうんだよなあ〜」、「これまで数え切れなくらい禁酒をしたが、ことごとく失敗に終わったなあ〜」と言わんばかりに、酒飲みのサガを、やや自虐めいた、独特のユーモアの味も忘れず詠み込んでいるところでしょうか。「新停」の二文字にそのすべてが表れているように思えます。この詩は『唐詩選』に収められており、江戸時代の日本人も愛唱した有名な詩です。

音読みでも、大変味わい深く読めますね、今回は中国語で何度も音読練習をしましたが、何度も音読していると耳に馴染むような魅力があります。

この詩の対句表現は、以下のようになっています。

<p>登高 dēng gāo</p>	<p>杜甫</p>	<p>登高 とう こう</p>	<p>杜甫</p>	<p>【首聯】 晴れた空に風が吹き荒れ、 哀しげな猿の声を運んでくる。 清い渚に白砂が広がり、鳥が飛び交う。</p> <p>【頷聯】 無数の枯葉が水面に落ちて、 尽きることない長江の水が、 急流に渦巻く。</p> <p>【頸聯】 辛く悲しい万里の旅路、 秋深く故郷は遠い。 長患いの身を提げて、独り高台に上る。</p> <p>【尾聯】 苦難の人生を恨みつつ、 白髪頭となりはてて、 濁酒の杯も又やめにした。</p>
<p>【首聯】 風急天高猿啸哀(韻)</p> <p>【頷聯】 无边落木萧萧下</p> <p>【頸聯】 万里悲秋常作客</p> <p>【尾聯】 百年多病独登台</p> <p>艰难苦恨繁霜鬓</p>	<p>【首聯】 風が急に天高くして猿声哀し</p> <p>【頷聯】 無辺の落木蕭蕭として下り</p> <p>【頸聯】 万里悲秋常に客と作り</p> <p>【尾聯】 百年多病独り台に登り</p> <p>艱難苦だ恨む繁霜の鬢</p>	<p>【首聯】 風急天高猿啸哀(韻)</p> <p>【頷聯】 无边落木萧萧下</p> <p>【頸聯】 万里悲秋常作客</p> <p>【尾聯】 百年多病独登台(韻)</p> <p>艰难苦恨繁霜鬓</p>	<p>【首聯】 風が急に天高くして猿声哀し</p> <p>【頷聯】 無辺の落木蕭蕭として下り</p> <p>【頸聯】 万里悲秋常に客と作り</p> <p>【尾聯】 百年多病独り台に登り</p> <p>艱難苦だ恨む繁霜の鬢</p>	
<p>〔平声灰韻〕</p>				

【首聯】

風急一天高一猿嘯哀 ↔ 渚清一沙白一鳥飛回

【頷聯】

无边一落木一蕭蕭下 ↔ 不尽一長江一滾滾來

【頸聯】

万里一悲秋一常作客 ↔ 百年一多病一獨登台

【尾聯】

艱難一苦恨一繁霜鬢 ↔ 潦倒一新停一濁酒杯

頷聯と頸聯は、それぞれ対句にする。これが律詩の原則ですが、この詩に限って言えば、首聯、尾聯も含めて、すべての聯が対句になっています。この詩の響きの良さは、こんなところにもあるのかもしれない。

また、詩の中に散りばめられた言葉は、すでに何らかのイメージを持っています。これも漢詩の面白いところです。例えば「猿声」→「物哀しい」。「悲秋」という言葉は多くの場合、男性の悩みを表し、対する「傷春」は女性の悩みを意味します。「樓閣や高台など、高いところに登る」とは、多くの場合、男性なら「望郷の念」、女性なら「帰らぬ夫を待つ」、というイメージがあるそうです。なるほど一、と頷く一同に「今はその逆で、奥さんは旅行、旦那は留守番というパターンですけどね」という植田先生の吹きで爆笑に。

また、重陽の節句というイメージも重なります。「今の日本に菊酒の習慣は殆んど見かけませんが、花札の菊の絵にはなぜか盃が描かれてますね〜」ホント、そう言えばそうです！幼い頃、お正月のた

びに親戚たちが集まり座布団に花札を並べていた風景を思い出しました。

そして最後はみんなで杜甫の人生は一体幸せだったのかどうか、との話に盛り上がりました。杜甫は7歳で詩を書き始め、14歳から社交界で一流の文人たちと酒を酌み交わし、若い頃には一人で旅に出たこともあったようですが、その頃の作品は残っていません。恐らく杜甫自身が気に入らなかったのだろう、とのこと。

「春望」を書いた後、秦州を經由して成都への旅。そして、また、転々と流浪する旅人となりながらも常に「皇帝に仕え、国家のため、人民のために」という壮大な夢を抱いて生き抜き、人生の幕を下ろした杜甫でした。

「苦難の旅がなければ、杜甫の作品も生まれなかったってことだね。宮廷詩人として、権力の下でめくめくと過ごす杜甫の姿は想像もできない。天才は苦勞するほどいいものが残るんだね……。凡才が苦勞してもねえ…」という先生の吹きに一同また笑い。

杜甫の人生は苦勞の連続であったかもしれないけど、杜甫の才能を愛した人々が各地にいて、杜甫の詩を記録し、後世に伝え、1300年経った今でもこうして人々の心を打ち続けていること。そして、たった一人の妻がどんな艱難辛苦の間も付き添い、最期まで一緒だったことは、つまるところ「杜甫の人生は幸せであった」と結論できるのではないのでしょうか。

『「漢詩の会」たより』（中国語で読む漢詩の会報告）は花岡風子さんの執筆で、2016年6月講座以来の内容が「わんりい」のホームページに掲載されています。

キーワード：中国語で読む漢詩の会報告 wanli-san.com/m-essay/huuko/huuko.html